高尾和宣様

松下さんを経由して、作品のさいごの章（〜10〜）の更新版コピーもいただいています。
はらわれている御苦労を思うにつけ、門司大里教会に関する高尾さんの印象〜把握(註1)が既に記述されておられるようになるのは、或る意味で仕方のないことだと思うのですが、著者の〈自由〉な印象や把握の記述以上に、作品のはらんでいる関係性がもう一歩踏み込んだ記述を要求しているように思われてなりません。
そこで、山本さんと接する機会の多いわたしの把握も参考にしていただければ幸いと思います。
まず、山本さんは永里を"「教徒でないひと」という理由で無視〜排除するようになった"のではありません。これは、明らかな誤認です。むしろ、今でも非信徒に開かれない教会は存在し得ないというモチーフは彼の基本的なものでしょう。
しかし、問題は自分の生き方や教会への関わり方、思索の内容〜方向性を変えることを迫るような批判者としての非信徒性を松下さんに感じ、そういう存在へとの

対応が不可能になってきたということだと思います。松下さんが直接批判したというのではなく、その表現〜存在が、彼にとって桎梏と映ずるような逆転が生じているのです。長女の光子さんが宗教や性の問題を含む反旗をひるがえして家出をしたことへの〜苦痛〜も相乗され、ますます強固に自己の領域を防衛しようという思いが強まってきたように見えます。(註2)

これは、山本さんだけに固有の問題ではなく、松下さんの固有名詞を批判的(一好意的)にかかげて自己の存在様式を弁護〜温存しようとする全ての(特に反権力を自認し、知的な作業を重視する)人々の問題でもあります。われわれや高尾さんが今彼らと違った現われをしているように見えるのは、山本さんが言うように"松下さんとの距離にめぐまれている"ということではなく、松下さんに象徴される〜なにものか〜の批判の渦中で、最大の振幅を避けずに生きようとする思いを持続しているという〈一〉点にかかっているのではないでしょうか?(註3)

自分の主張や現在的なあり方を容認し、弁護したり、手助けしたりしてくれる人だけを取り込もうとする〈場〉は、必ず

退廃を生んでしまいます。今月付の批評集γ篇6〜7(註4)の刊行主体が、〜批評の総体に対して示している開き方が、門司大里教会に限らず、どの〈場〉〜個人にも要求されているのではないかと思われます。

9月4日の門司大里教会・土曜〈学校〉で、山本さんは、「黙る」ということについて触れ、今年の終戦記念日前後の新聞記事を引きながら、50年の沈黙をくぐって、やっとことばになるという事態がありうる、ということを述べていました。わたしが、高尾さんの〈根本〉(註5)さんを主人公とする作品も「黙」という題名であることを告げ、第一次作品がわたし(たち)にも公開され検討中であること、山本さんも実名で登場していたことなどを言うと、「山本には開かれていない」と言われるので、「それは、山本さん自身が開かれていないこと(に規定されている)。自ら回路をたどってみてはさ」と反論すると、「読みたいという意欲は無い。山本が開かれていないというのは、永里さんの思い込みに過ぎない」という対応でした。

山本さんはあくまで松下さんとの関係に限定して自らの〈保留〉をとらえ、わたしがその松下さんから自立的でない

という思い込みから、その件に関する批評への公開的対応も〈保留〉しているのです。

わたしも口が重い方で、よく黙ってしまいますが、それは、より内省の時間を繰り込む必要であったり、事態に即座に対応できない絶句といったものであったりしますが、その時にも、「沈黙」が自他にもたらす〈死〉に自覚的であろうと思い、なんとか表現域に浮上しようともがきます。高屋さんもおそらくそうではないでしょうか。

今の山本さんは、一方で説教（7月4日の説教の後、何か言からとして口ごもっている菅原信徒に、「コメントはいいです。今日はキリスト者への問題提起だから、受けとめるなり、拒否するなりしてくれればいいです」…これは相手の自由の保障ではなく、自足をかき乱されることへの拒否反応のように響きました。これも、わたしの思い込みから来るそら耳と彼は言うでしょうが…）に固執しながら一方では、関係性の〜こえ〜の〈ひとつ〉に耳を閉ざし、口を閉ざしてしまうのです。この屈折した方法的な沈黙は、表現論的な〈死〉を意味します。もし或る他者の〜こえ〜が自分に届かない欠損〜質を帯びているという

のであれば、その感受と対応の根拠を、より広い〈場〉で展開すべきで、関係性の総体に届く自らの〜こえ〜を創り出す責任もあると思います。〈保留〉と、説教の逆にリケード的な逆転によって呻いているのは、何よりも山本さんにとっての〈 〉的なものであると、わたしは批判しているつもりです。彼が無視〜排除したいのはわたし〜わたしの批判ではなく、わたしの〜こえ〜に同調する自らの内奥の〜こえ〜かもしれません。

ところで、「ひょっとすると、根本さんは仮装被告団の発想を乗り越えているかもしれない。」という高尾さんの期待の記述は、水をさすようで恐縮ですが、期待としてもピントをはずしている、という印象を持ちました。その理由は、わたしの理解では、仮装被告団（被告）というのは、固定的な集団の呼称ではなく、わたしたちが動かし難い審問状況に押し出され、その不可避性を自覚的に引き受けて行く時に出会う関係性の総称ではないかという点と、〈根本〉さんが今後もし仮装被告団として登場することがあるなら、それまでの自らの「沈黙」の根拠を司法の罪と同じ比重で問い切る深さが

問われると思っているからです。

〈山本〉さんもまた仮装報告因的に現状を転倒するプロセスが問われており、さらに、それらの固有名詞に、自らを双極変換する想像力がわたしたちの全てに問われているのだと思います。

〜さいごの章〜は次の〈作品〉への序曲でもあり、〈作者〉の総括的な視点が過渡的にも表出され、担われざるを得ないのだと思います。あえて以上を記してみました。（蛾眉）

大変な作業の中、どうぞお元気で！

〜1993.9.7〜

永里繁行

追記、この手紙を、次の土曜〈学校〉通信に応用させていただきます。